
プロジェクト報告

統万城遺跡を中心とする 中国オルドス地域の遺跡調査

市 来 弘 志

本プロジェクトは、私が長期にわたり研究対象としている統万城遺跡（陝西省靖辺県）および関連遺跡についての調査を行うものである。私は1997年以来、統万城遺跡を既に17回あまり訪ね、2002年からはほとんど毎年のように現地を訪れていたが、コロナ禍の2020年以降は訪問する機会がなかった。そのため2024年はまず現地を訪ねて、2020年以降の遺跡状況の変化を確認することを第一の目的とした。

大夏嘉平陵研究会

私は2014年までは、当時の勤務先であった陝西師範大学の主催するプロジェクトに参加する形で統万城遺跡を訪れていた。これは陝西師範大学の国家級研究機関である西北歴史環境与経済社会発展研究中心（現研究院）が統万城遺跡に建設した「統万城綠色都市恢復基地」を拠点とするもので、日本の植林専門家東城憲治氏の技術指導と資金提供を受け、2002年から毎年3月に同中心の教授および学生と共に統万城遺跡の周囲で植林活動を行った。これは西北の季節風により砂に埋もれ風化の危機にさらされていた統万城遺跡の保護に大いに役立つ意義深い活動であった。

このプロジェクトが諸般の事情で中断した2015年以降も、学会参加や個人的調査などで毎年現地に行っていたが、2020年から2022年まではコロナ禍で中国に渡航できず、2023年に当時の勤務先である同済大学のある上海に行くことはできたが、統万城遺跡に行く機会がなかったため、2024年は実に5年ぶりの訪問となった。

統万城遺跡は近年観光化されて交通の便が良くなったものの、公共交通機関で行くには不便である。関連する諸遺跡はさらに交通不便な場所にあり、現地の考古事情に精通する人の案内がなければ遺跡の現場に行くことすら難しい。そのため現地の研究パートナーの存在が不可欠である。今回は陝西省榆林市にある榆林市大夏嘉平陵研究会会長の

呼立濤氏にご助力をお願いした。

呼立濤氏は大学教師や研究機関の職員ではなく、民間の郷土史家である。榆林市に生まれ育った氏は、郷土から出た英雄で五胡十六国時代の大国のひとつ大夏国の建国者である赫連勃勃（381～425）および彼の築いた統万城遺跡に関心を持ち、仕事の傍ら現地調査と研究を続け、2009年に同好の志と共に榆林市の公認団体として「榆林市大夏嘉平陵研究会」を設立した。2013年には榆林市の観光名所で文化財である鐘楼に事務室を設けた。私は榆林空港で呼氏と落ち合った後、まずこの事務室に案内された。このような歴史的建造物に事務室を置けるのは異例なことであり、同研究会と市政府の強い結びつきを感じさせる。ここには幾つかの大夏関連とされる遺物が展示されていた。

大夏嘉平陵研究会は、さらに榆林市内北部の歴史的建造物である梅花楼にも事務室を構えている。私はこちらにも案内して頂いた。ここにはさらに多くの遺物が置かれていた。また後日には主要な会員10人あまりと会食したが、会員数は数十人を数え、たびたび現地調査を行うほか、地元の企業家の後援を受け、様々な啓蒙活動を実施し、市内に赫連勃勃の石像や石碑を建設するなど、幅広く活動を行っている様子であった。

大夏嘉平陵研究会は郷土史家・歴史愛好家の団体であり、大学等の研究機関ではないため、学術界における認知度は低く、私も寡聞にしてその存在を知らなかった。本会を知ったのは上海の友人の紹介による。この友人松田奈月氏は上海に長く在住する映像作家で、NHKなどのドキュメンタリー番組の現地コーディネーターを務めている。2022年に松田氏がディレクターとしてNHK-BSの番組『百花繚乱！ 麺道をゆく～中国・黄土高原～』（2023年2月23日放送）の取材のため陝西省榆林市を訪れた際、現地を案内したのが呼氏であった。この時には麺料理の名店を回ったのだが、その折りに呼氏が統万城について語ったことから、松田氏が私に紹介してくれたもので、全くの偶然である。これは幸運というほかはない。

後述のように、大夏嘉平陵研究会は学術研究の上では幾つかの弱点を抱えている。ただ各地の郷土史研究と遺跡保存にはこのような草の根の力が不可欠であり、同研究会が榆林市における人文学の裾野を支えていることは間違いないであろう。

統万城遺跡および統万城遺址博物館

統万城遺跡は大夏国の首都として建設されて以来1600年あまりの歴史を持ち、魏晉南北朝時代の都城としてはほぼ完全に保存されている現存唯一の遺跡である。その価値は極めて高く、1996年には全国重点文物保護単位（国の史跡）に指定され、2012年には中国国家文物局の世界遺産登録申請予備リストに掲載された。2013年には国家遺址公園に

認定され、2017年から建設が始まり、2023年5月に公開された。同時に統万城遺址博物館がオープンした。既に開館から1年以上を経ているにもかかわらず、私はまだ訪ねる機会がなかった。

呼氏は博物館の学芸員とも懇意で、博物館側は我々の到着を出迎えてくれた。またここで以前お世話になった統万城文物管理处前処長の王先生と、同処前共産党書記の劉書記に久しぶりにお目にかかった。王先生は既に定年退職し、劉書記は別の部署に転任しているが、事前にご連絡したところ、温かく迎えて下さり、久闊を除すことができた。王先生は既に70代後半だが研究への情熱は冷めることなく、1980年代に初めて統万城遺跡を本格的に調査した載応新氏（当時西北大学教授）の調査隊に参加した時の思い出を文章に認めたいと語っておられた。

統万城遺址博物館は建物は新しく綺麗だが、遺跡ではそれほど多くの遺物が出土していないうえ、重要な文化財は榆林市か西安市の博物館に持って行かれてしまったため、めぼしい実物の展示はない。統万城の大型模型、CGを駆使した映像、往事の匈奴人や他の遊牧民の服装を再現した蠟人形などが目立つ程度である。展示見学中に、カメラを持った博物館職員の方から、突然インタビューを頼まれた。事前に何の話もなかったため十分な準備がなく、また当日はやや疲れていて体調が万全でなかったこともあり、今まで何度も統万城を訪れたことやその歴史的価値について数分間話したくらいで、残念ながらあまり気の利いたことも言えなかった。なおこの時の動画は、中国のSNSである微信（We chat）上に開設されている統万城遺址博物館の公衆号（公式サイト）にアップされている。博物館の宣伝に少しでも貢献できれば幸いである。

統万城遺跡は以前は自由に城壁の上に登ることができたが、2017年頃から保護のため金網が張られて基本的に登ることはできなくなった。2024年も同様であった。遺跡保存のためにはこの措置が適切なのは言うまでもないが、2012年に大規模発掘が行われた西城西門は現在も出入りできるなど、かなりちぐはぐである。地元政府は世界遺産登録に向けて熱心に運動しているが、それには保存措置をあらためて見直す必要があるとも感じられた。ともあれ5年ぶりに白亜の美しい城を見られたのは真に感慨深いものであった。

大夏嘉平陵

赫連勃勃の墓と伝えられるものは、陝西省、甘肅省、寧夏回族自治区などにある。陝西省延川県の「赫連勃勃墓」は一応陝西省重点文物保護單位（省の史跡）に指定されているが、その根拠は地元の伝承に基づくに過ぎず、考古発掘は行われていないので信憑

性は極めて低い。他の「遺跡」も事情は同様であり、現在まで赫連勃勃の陵墓は確認されていないと言って良い。

これに対し呼氏は、榆林市東北の麻黄陵にある「七山」こそ赫連勃勃墓であるとの持論を持っている。呼氏は現地を詳しく案内してくれたが、呼氏によればここは赫連勃勃その人だけでなく、彼の祖先である匈奴鉄弗部の歴代族長および赫連勃勃の2人の子までの一族墓であり、7つの人工の墳丘があるという。確かにこの地区にはなだらかな丘が連なっており、自然山と思われるが、人工的な墳丘に見えなくもない。ただしもし人工的墳丘墓であれば、漢代の歴代皇帝陵に匹敵する大規模なものとなり、当時の大夏国の国力から考えればこのような大規模土木工事が実施されたとは考えにくい。唐代の皇帝陵のような自然山を利用した墳墓と考えればまだ可能性はあるだろう。

問題は呼氏がここを赫連勃勃墓に比定する主な根拠が、清代道光年間に編纂された『榆林府志』だという点である。これは19世紀半ばに編纂されたものであり、5世紀の歴史に関する史料価値は全くない。せいぜい19世紀の人々が地元の歴史についてどのような伝承を伝えていたかを知ることができるのみである。また7つの丘それぞれの被葬者については、地元の道観に伝わる伝承に基づいており、これも史料的には全く根拠にはならない。従って麻黄陵の「赫連勃勃墓」の信憑性は、延川県など他地域と大同小異であり、現在のところあくまで伝承レベルに留まる。もっとも他地域の「赫連勃勃墓」が統万城遺跡から遠く離れているのに対し、麻黄陵は統万城からそれほど離れておらず、その点では若干有利ではある。

呼氏の主張は編著書『追尋大夏の栄光——匈奴王赫連勃勃研究』（三晋出版社、2019年）に詳しいが、やや根拠薄弱で大風呂敷を広げる傾向がある。氏の主張をより学問的に立証しようとすれば、厳密な史料批判と、何より考古発掘が必須である。従って道は遠いと言わざるを得ないのだが、各地の「赫連勃勃墓」がいずれも伝承レベルの信憑性しか持たない現状を鑑みれば、麻黄陵の「赫連勃勃墓」は考察に値するものと言えるであろう。

以上のように、今回の調査では、何度も訪れている統万城の現状を確認すると共に、開館した博物館を見学し、また今までほとんど知ることのなかった麻黄陵の「赫連勃勃墓」などを見ることができた。今後はこのような知見を元に、統万城遺跡および周辺に関連遺跡に関する歴史地理的考察をさらに深めていきたいと考えている。